

本研究会を毎回傍聴している宮本さん(生活保護を受給されている当事者の方)から「生活保護を受給すること」と「居場所」に関するご意見をいただきましたので、提出させていただきます。ぜひこうした当事者の声を議論に反映させていただければと思います。

稲葉剛(NPO法人自立生活サポートセンター・もやい)

生活保護を受給して ～私の安心できる居場所～

宮本 2010/6/7

[生活保護・受給してからの苦しみ]

生活保護を受給して、「良かったね」と言ってくれる人は少ないと思う。

たとえ、そう言ってくれる人がいたとしても、それは支援団体の人達や、「生活保護」の意味を理解してくれている人だと思う。

受給していて、辛いと思う事は沢山ある。

1. 受給日の日に、お金を受け取りに市役所行った際、ケースワーカーの人の対応が冷たい。
2. 病院に行きたくて、医療券を取りに市役所に行った際、ケースワーカーの人の対応が冷たい。
3. 病院に行った際、お会計の時に診察券だけ返されるのが辛い。病院の受付の人の態度や、周りの患者さん達の目が気になる。
4. ケースワーカーの人に「働いて下さい」と追い立てられるのが辛い。
5. 友人に「生活保護を受給している」という事が打ち明けられない事が悲しい。
6. 友人の結婚式に行けない事や、出産祝いができない事が悲しい。
7. 「生活保護」を受給しているという事が自分自身で受け入れられない。

辛い事を上げれば切りがなく、きっとこれらの出来事は、生活保護を受給した者にしか分からない思いなのだと思う。

これらの中で、私が一番悲しいのは「友人に打ち明けられない事」と、自分自身が「生活保護制度」の事を受け入れられない事だ。

私には、どうしてもこの事を打ち明けたい友人がいる。

でも私は、未だにこの事を打ち明ける事ができず、「今どこで働いているの?」という友人の問いに対して、「喫茶店で働いている」という嘘をつき続けている。

でも、もし私が「生活保護を受給しているんだ」とその友人に言えば、きっと理解してくれるかもしれない。だけど、理解してくれないかもしれない・・・

私がそうしてしまうのは、以前、別の友人に「実は私、今生活保護を受給しているんだ」と打ち明けた事があった。

その友人は、一生懸命理解してくれようとしたけれど、最後に言われた言葉が「働かなくてもお金が貰える、楽してお金が貰える。というふうに思わないで」と言われ、「私は、あなたの事を信じている」と言われた。それを聞いた私は、何だか複雑な気持ちだった。これらの言葉は、友人なりの励ましの言葉だったかもしれないが、私はとても傷ついてしまった。

でもその一方で、この友人の反応こそが、今の「生活保護」に対する、世間一般の人達の反応だとも思った。「生活保護」を受給する事が、まるで「悪」のように言われ、「恥」とされている。

そして何よりも辛いのは、私自身が「生活保護を受給している」という自分に対して引け目を感じているということだ。

生活保護のお金で何かを買おうとした時、私はいつも「このお金は国のお金から出ている、みんなの税金から出ているのだ・・・」と思ってしまう。「もう少し自分で、何とかできたのではないか・・・」とか、「私はやっぱり甘えているのか・・・」とか。そんな事を思っていると、どうしても受け入れる事ができない。

【二度目の生活保護】

生活保護を受給するのは、実はこれで二度目。

一度目は今から5年前、精神疾患を患い、働けなくなって、生活が苦しくなってしまった。

一人暮らしをしていた私は、どうすればよいのか分からず、死ぬ事ばかり考えていた。

そんな時、見るに見かねた母親が「生活保護を申請しよう」と言ってくれて、私はその時初めて「生活保護制度」の事を知り、この制度の事を聞いた時「なんて素晴らしい制度があるのだろう」と思った。でも申請するのは大変で、私は何をどうすればよいのか分からず、全て母親が手続きをしてくれた。私は、母親に頼り、母親のおかげで申請する事ができた。

でも生活保護を受給してからも、私は何だか苦しかった。それは、母親が全部やってくれて、自分自身で勝ち取った権利ではなかったからだと思う。だから私は、早く生活保護から抜け出したいとたまらなかった。

私は2年間受給し、アルバイトが決まり、ようやく生活保護から抜け出せる事が出来た。

「もう絶対、生活保護には戻らないぞ！」と心に誓った。

それから3年後、私はまたあの5年前と同じ状況に陥ってしまった。

このままでは、生きていけなくなってしまう。でも今の私は、「生活保護制度」の事を知っている。

自分が生活できなくなってしまう時、何をどうすればいいのかという方法を知っている。

でも生活保護を申請しようと決意するのは抵抗があったし、またあんな惨めな思いをするのかと思うと、とても嫌だった。

でも私は、生きなければならず、生き延びる為にはこの制度を使うしかなく、だから今度は私が、自分自身で決め、自分で申請しようと決めた。

まず、市役所に相談、案の定申請書は出してはくれず、「もやい」に相談。「もやい」の人に生活保護申請の同行をしてもらい、申請、受給する事ができた。

こうして今、私は生き延びる事ができている。

一度目の生活保護受給と、今回の生活保護受給の大きな違いは、「自分自身で決め、相談し、申請した」という事だと思う。

一度目の時は、受給している事に対して引け目を感じ、家にひきこもっている事が多く、自分の活動できる場所や「自分の居場所」を見つける事ができなかった。

でも今は、引け目は感じてはいるけれど「もやい」の人達を通じて、いろいろな活動に参加したり、いろいろな人達と出会う事ができている。

二度目の生活保護は、私にとって「人との繋がり」や「居場所」「新しい自分の発見」を与えてくれた。そういう意味で、今回のような体験は、私には「意味」のあるものだった。

今まで私は、自分の人生が恥ずかしいと思ってきたが、このように考えてみると、今までの自分の人生が肯定できたような感じがした。

【働くということ・生きるということ】

私は今、働く事が怖いと思っている。

こんな事を言うと「何を言っているんだ」とか「みんな大変だけど働いているんだ」とか言われてしまう。

「働く」ということは、「お金のため、生活のため」人によって様々だと思う。

だけど、私は「働く」という「意味」がわからないでいる。

今の私は「働く」という場所が、戦場のようで、みんな敵で、お互い蹴落としている・・・という感じがして
しまう。

朝の通勤電車でも、何かに追い立てられているような気がするし、とても息苦しい。

私は今、「野宿者支援」のボランティアに参加していて、まだほんの数回しか行っていないけれど、その場所
に行くと「働く」ということ「生きる」ということは何かを考えさせられる。

以前私は、野宿している人達との共同炊き出しに、参加した事があった。みんなでカレーを作ろう！という炊
き出しで、最初私は、衛生面で気になってはいたけれど、やっている内にだんだん楽しくなってきた、最後はみ
んなと一緒にカレーを食べていた。

この時、みんなで作業していて思った事は、「働く」ってこういう事なんだなと感じた。

みんながそれぞれ自分のペースで動いており、早い人もいればゆっくりな人もいて、みんなで助け合っている
感じがして、一緒に作業をしていて、とても居心地が良かった。

市場で働くという事ではないけれど、みんな「働いている」のだなと感じた。

私は今、働く事が怖いし、生活保護の事を受け入れられずにいたりする。

これからも私は、周りからの人から「甘えている」とか「楽しんでいる」とか言われたり、冷ややかな目で見て
くる人達と出会うだろう。

でも私は、もう一人ではなく、支えてくれる仲間がいたり、いろいろ話せる場所がある。

このような人・場所の繋がりを意識しながら、いろいろな感情と折り合いをつけながら「働く」ということ「生
きる」ということを考えていきたいと思う。